

2004年の厚岸町におけるゼニガタアザラシ

*Phoca vitulina stejnegeri*の漁業被害および混獲死の状況

齋藤幸子・山田京子

帯広畜産大学畜産学部獣医学科
ゼニガタアザラシ研究グループ

はじめに

Harbor seal (*Phoca vitulina*)は北半球に広く分布しており、地理的に5亜種が認められている(Bigg, 1981)。このうち、ゼニガタアザラシ *Phoca vitulina stejnegeri*(以下ゼニガタ)は、北海道からカムチャツカ半島に分布する陸上繁殖型のアザラシである。北海道では太平洋東部沿岸で1年を通して観察され、日本では唯一繁殖する。環境省のレッドデータブックでは絶滅危惧種IB類に指定されている(環境省 2002)。1940年代に少なくとも1500頭確認されていたゼニガタは、1980年代には400頭未満まで減少した(伊藤・宿野部, 1986)。1980年代以降は徐々に増加傾向にあると考えられる(齋藤・渡邊, 2004)。

厚岸町には、ゼニガタの上陸頭数が2番目に多い大黒島が沖合7kmほどに位置し、他に2ヶ所の上陸場が存在する。近年の個体数調査では、厚岸町には少なくとも200頭のゼニガタが観察されている(ゼニガタアザラシ研究グループ、未発表)。

ゼニガタの漁業被害については1980年代から道内各地で研究が行なわれており、厚岸でも1984年に新妻昭夫氏により調査が行われている(新妻, 1986)。その後、近年では故上金氏(ゼニガタアザラシ研究グループOB)による聞き取り調査が行われるのみであったが、2003年にはゼニガタアザラシ研究グループ(以下ゼニ研)によりゼニガタの混獲数および被害状況の予備調査を行なった。(ゼニ研、未発表)

本稿では、2004年の厚岸町におけるゼニガタの混獲死および漁業被害状況を報告する。

調査地と調査期間及び方法

厚岸町における漁業一般を対象とし、主にサケ定置漁について、春サケ漁期(5月中旬～7月中旬)には定置乗組員にアザラシ類の混獲数、種類、月日を可能な限り記録してもらい、後に聞き取り調査をおこなった。秋サケ漁期(8月下旬～11月下旬)の9月中(計18日間)乗船し、アザラシの混獲数、種類、乗船期間中の漁獲したサケのうち、頭部がない、もしくは頭部のみになっているサケをトッカリ食い(写真1)としてトッカリ食い本数を可能な限り記録し、混獲されたアザラシに関しては簡易計測(体重、性別、全長、体長、腋下周囲長)を行なった。厚岸町でのサケ定置網は現在、

3か統あり、1船ですべての網を毎日あげている(写真 2-1、2-2)。定置網は金庫と呼ばれる、最終的に鮭が入る箱網を揚げて鮭を回収するのだが、現在この金庫は、合計8個ある。これらの定置網は大黒島を含む厚岸湾周辺のゼニガタの上陸場に隣接している(図1-1、1-2、1-3)。また、その他の漁種に関しては、主に聞き取りを行い、シシヤモ底引き網漁に3日間(11月)、厚岸湖での氷下小定置漁に1日同行調査(2月)を行った。シシヤモ底引き網漁は、厚岸湾内で魚群を狙い底引き網を入れ、魚群を捕まえる漁法であり、シシヤモ以外の様々な魚類が獲れる。また、氷下小定置漁は、サケ定置網様の小規模な定置網を厚岸湖内に仕掛ける漁法である。冬季に行なうため、厚岸湖は氷結し、結果的に氷の下に網が存在する状態となる。漁は、氷上で氷を割り網あげを行なうことになる。

結果

春サケ定置漁期(6月12日～7月31日)の50日間で、混獲されたアザラシ類はゼニガタ3頭、ゴマフアザラシ(以下ゴマフ)2頭、合計5頭であった。また、秋サケ定置漁期(8月24日～12月3日)の102日間で、混獲されたアザラシ類はゼニガタ10頭、合計10頭であった。

乗船期間(9月14日～9月31日の計18日間)に混獲されたアザラシはゼニガタ4頭であった。この4頭については簡易計測を行なった。体長は平均137.625cmだった。(表1)秋サケ定置漁期間と混獲数との関係を示した(図2)。

乗船期間中のトッカー食いの本数と漁獲本数に対する割合を表に示した(表2)。

◎聞き取りによるアザラシの混獲及び食害の報告

- ・湾内のししやも底引き網漁では、たまにアザラシが後ろをついて周り、まれに混獲される(10月が多い)ことがある。湾内でも、苫多・門静方面に多く見られる。11月に3回乗船させてもらったが、アザラシは確認できなかった。(写真 3-1, 3-2)
- ・サケ定置では金庫ではなく、網の入り口付近(遊び場)で遊泳している。
- ・漁協に被害届けが来るのは、3月～4月の春先である。
- ・主に門静・苫多方面の湾内で行なう漁業者に被害届が集中している。
- ・冬場の厚岸湖内の氷下漁(写真 4-1, 4-2)に年間1～2頭、アザラシの混獲があり、アザラシの上陸・遊泳が見られる。食害も若干あり、アザラシがいると魚がいなくなるという声も聞かれた。
- ・3月、4月の湾内の小定置内でアザラシが跳ねるのを確認している。

考察

2004年の春サケ定置漁での混獲数は、ゼニガタ3頭、ゴマフ2頭であり、秋サケ定置漁ではゼニガタ10頭であった。これは昨年の春サケ定置での混獲数、ゼニガタ6頭、ゴマフ2頭、秋サケ定置漁での混獲数、ゼニガタ14頭、クラカケ1頭であった(ゼニ研、未発表)のに対し、春サケ定置漁でも秋サケ定置漁でも、やや混獲数は少なかった。今年度の秋サケ定置漁での混獲数の減少は、漁期初めの悪天候により、例年よりも網入れが後れた事も影響するのではないかと考える。過去の調査では春サケ定置漁でゼニガタ2頭、ゴマフ9頭が混獲され(新妻、1986)、秋サケ定置では3頭前後のアザラシが混獲されている(伊藤・和田、1983)。昨年と今年の混獲数では若干変動があ

るものの、過去の調査に比べてゼニガタの混獲数は増加し、春期のゴマフの混獲数が減少している。1980年代に比べ、厚岸湾周辺でのゴマフの回遊行動や行動域に変化が表れたのか、もしくは、この20年間の厚岸湾周辺のゼニガタの生息数増加が関係するのかもしれない。しかし、今年の悪天候が影響している可能性も否定できないため、今後の継続した混獲数調査と厚岸湾周辺のアザラシの生態調査が必要となるだろう。

今回、測定したゼニガタ4頭の平均体長は137.625cmであり、体長と年齢の関係から(鈴木・山下、1986)0~3歳とどれも未性成熟個体にあたる。これは、1980年代の調査で納沙布・厚岸でのアザラシ羅網個体に若い個体が多いこと(和田ら、1986、新妻、1986)と一致する。このことより、近年でも変わらず、経験の少ない若い個体が混獲死し、これに地域差が無いということが考えられる。また、秋期でのアザラシの混獲が漁期前半に集中していることも、納沙布での混獲傾向に類似する(和田ら、1986)。これより、厚岸でのアザラシの回遊行動も納沙布と同様であると推察される。そして、乗船期間中のトッカリ食いの漁獲本数に対する割合は0.03~0.31%と非常に少なく、厚岸での秋サケ定置には大きな被害とはなっていないと考えられる。逆に、聞き取りにより厚岸ではサケ定置以外の漁での影響が大きいようである。今回のししゃも底引き網漁では、アザラシを目撃できなかったが、湾内でも苫多・門静方面でよく目撃すると言う。これは、苫多・門静方面の漁でアザラシによる食害報告が多い(鈴木、2001)のと同じである。また、漁業者の話によると厚岸湾内でも、アザラシを多く目撃する場所は限られているようである。このことは、今後、厚岸湾周辺でのアザラシの回遊行動を把握することが被害対策のヒントになるかもしれない。

氷下漁の場合は、網入れのためにあけてある穴をつたって湖内の奥にも侵入し、アザラシが穴から顔を出しているのを目撃するという話を聞いた。湖内の漁の聞き取りによると実際の被害状況は湾内より深刻ではないように感じたが、実際の被害状況とは関係なくアザラシに対する感情として、害獣だからいないほうがよいと考える漁業者も少なくないように感じられる。今回、2月に1回氷下漁に同行したが、そのときにアザラシは確認できなかった。しかし、この時期に湖内の氷上にアザラシが上陸しているのは確認しているので、混獲や食害が存在することは考えられることである。

厚岸町では、年間約15種の漁業(牡蠣・アサリ・昆布を除く)が営まれており、獲れる魚種も豊富である。また、家族単位などの小規模で漁業を営んでいる場合に、漁獲量中のトッカリ食いの割合は高くなり、漁業への影響の度合いは大きくなり、場合によっては、漁業が成り立たなくなることもある。聞き取りの中には、直接的な被害ではなく魚を追い払うなど間接的な被害も聞かれるが、実際アザラシによるものなのかは不明である。また、22年前の聞き取り及び資料による調査では、あまりアザラシによる沿岸漁業での食害は深刻ではなかったようで、サケ定置や一部の刺し網に若干の食害があるが、加害者の特定は出来ていないとあり(伊藤・和田、1983)、現在とはだいぶ状況が違うようである。これは、当時と現在で厚岸湾周辺のゼニガタの生息数変化が影響している可能性も考えられるが、関連性の有無は今後の調査次第である。今後も継続して、1年を通しての様々な漁種での混獲・被害調査が望まれる。

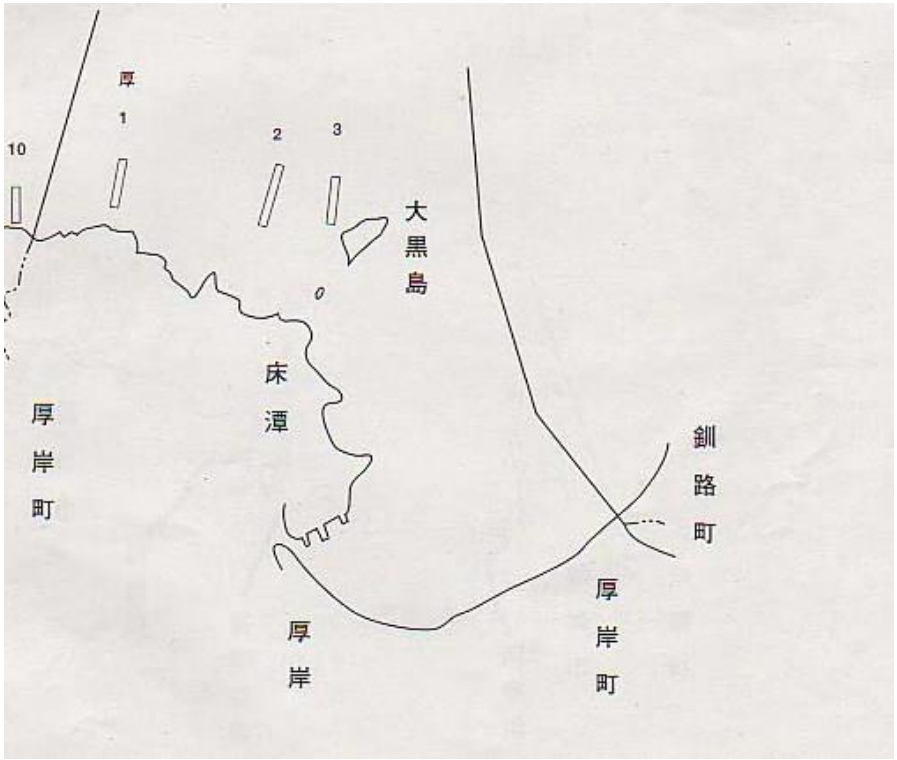


図1-1. 厚岸町におけるサケ定置網の位置

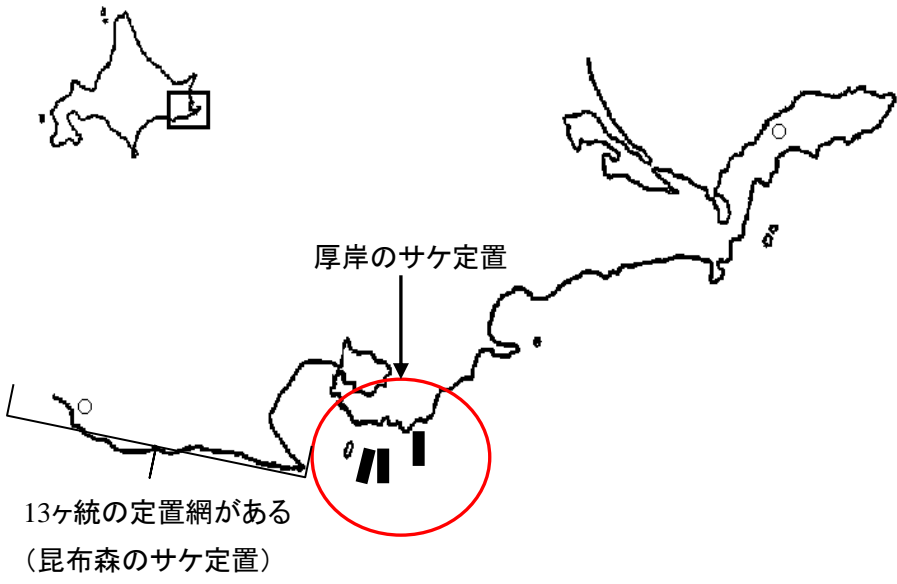


図 1-2. 厚岸湾周辺のサケ定置位置

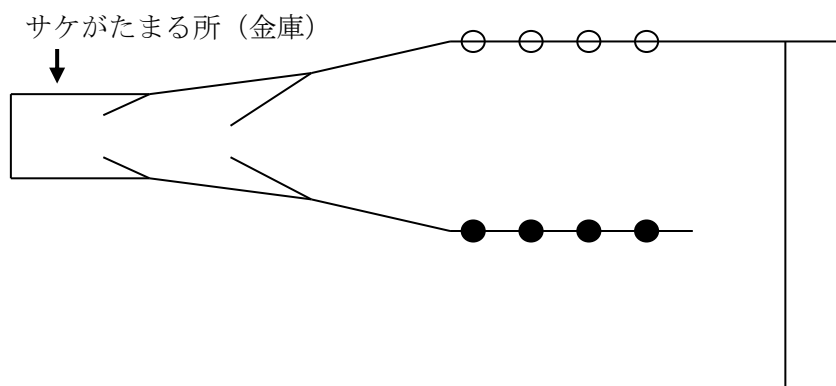


図 1-3. サケ定置網の構造

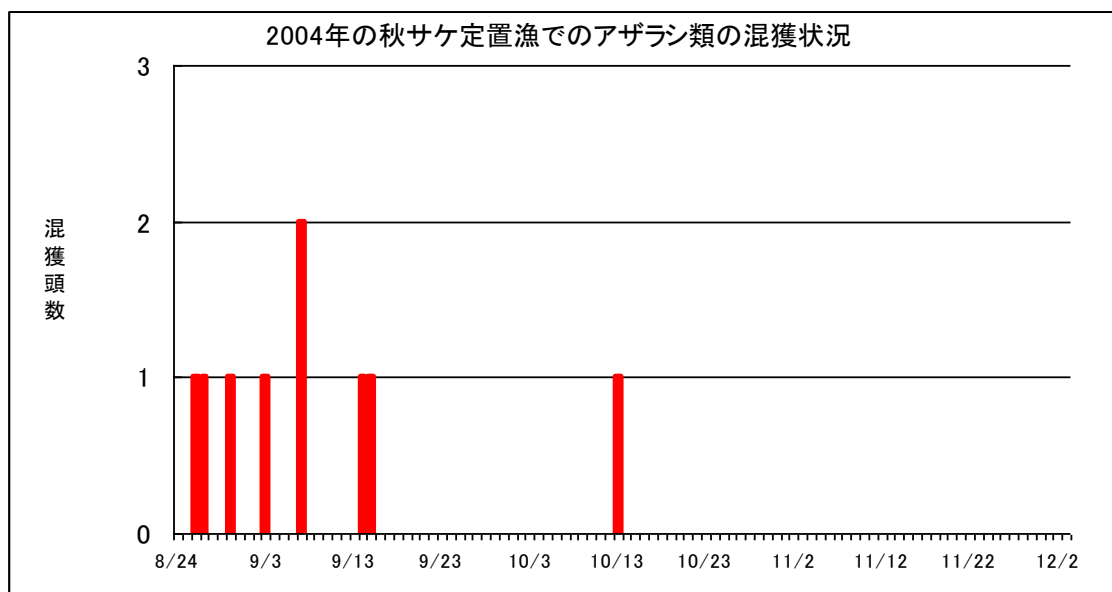


図 2. 2004 年の秋サケ定置漁期間のアザラシ類の混獲状況

日付	個体番号	全長	体長	腋下周囲	性別
40907	AZ0401	145	128	82.3	♀
40907	AZ0402	172	154	109.3	♀
40914	AZ0403	150	135.5	87.8	♂
40915	AZ0404	148	133	88	♂

表 1. 2004 年にサケ定置漁に混獲したゼニガタの簡易計測値(単位は cm)

月日	9月17日	9月21日	9月22日	9月23日	9月27日	9月28日	10月9日
トッカリ食い本数(本)	2	5	1	14	3	1	4
漁獲本数に対する割合	0.10%	0.20%	0.10%	0.31%	0.04%	0.03%	0.10%

表 2. 乗船期間中のトッカリ食いの本数と漁獲本数に対する割合



写真1. トッカリ食いのサケ



写真 2-1. サケ定置漁



写真 2-2. 大黒に近いサケ定置の定置網



写真 2-1. 厚岸湾におけるシシヤモ漁



写真 2-2. 厚岸湾におけるシシヤモ漁



写真 3-1. 氷下漁



写真 3-2. 氷下漁

謝辞

本調査では、(有)厚岸さけ定置の皆様には大変お世話になった。特に、船頭の平川廣志氏には現地での生活面での援助や聞き取り調査、乗船調査へのご協力と多大なる御厚意をいただいた。また、厚岸町漁業協同組合、厚岸水鳥観察館の皆様にも大変お世話になった。厚く御礼申し上げます。また、NPO 北の海の動物センターの小林万里氏、角本千治氏には様々な援助をいただいた。独立行政法人水産総合研究センター北海道区水産研究所亜寒帯海洋環境部高次生産研究室室長の山村織生氏、服部薫氏にはサンプリング場所を提供していただき、尚且つ計測等も手伝っていただいた。ゼニ研 OB 山頭範之氏、ゼニ研 3 年山城須賀子氏、2 年大橋宏美氏は特に現地調査に協力いただいた。厚く御礼申し上げます。また、厚岸町に移り住み、地元根付いた活動を地道に行なわれていたゼニ研 OB の故上金洋次郎氏が下地を作ってくれていたために活動しやすくなっていた。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

引用文献

- 伊藤徹魯・宿野部猛 (1986) 「ゼニガタアザラシの生息数と生息状況」ゼニガタアザラシの生態と保護 (和田一雄ほか編). 東海大学出版会, p18-58
- Bigg, M. A. 1981. Harbour seal: *Phoca vitulina* Linnaeus, 1758 and *Phoca largha* Pallas, 1811. In (S. H. Rindgway and R. H. Harrison, eds.) Handbook of Marine Mammals. Vol. 2: Seals. pp. 1-27. Academic Press, New York..
- 齋藤幸子・渡邊有希子 (2004) 「ゼニガタアザラシの概要と問題点」北海道の海棲哺乳類管理-シンポジウム「人と獣の生きる海」報告書- (小林万里・磯野岳臣・服部薫 編). 北の海の動物センター, p23-28
- 新妻昭夫. 1986. 大黒島のゼニガタアザラシ上陸場に近接するサケ定置網における漁業被害. 「ゼニガタアザラシの生態と保護」(和田一雄ほか編), pp.245-256, 東海大学出版会, 418p, 東京.
- 和田一雄・羽山伸一・中岡利泰・宇野裕之・島崎健二. 1986. 根室半島周辺海域の秋ザケ定置漁業におけるゼニガタアザラシの生態と被害について. 「ゼニガタアザラシの生態と保護」(和田一雄ほか編), pp.223-244, 東海大学出版会, 418p, 東京.
- 伊藤徹魯・和田一雄(1983)ゼニガタアザラシの漁業被害についての聞き取り調査報告. 哺乳類科学:45, p93-107.
- 鈴木重則. 2001. 厚岸町の漁業とアザラシによる漁業被害. 「えりもアザラシフォーラム報告書」(ERIMO SEAL CLUB), pp.24-29.